



## 大量消費社会におけるごみ減量実践 —「捨てる」ことへの抵抗—

Reducing waste in mass-consumption society—resistance against mass-disposal

浅田 静香

Shizuka ASADA

### 【要旨】

本論文は、京都市周辺に住むごみ減量実践者への人類学的な調査をとおして、ごみ減量に取り組む人びとの実践と、かれらを取り巻く社会の実態を明らかにし、現代社会の構造とその流れに従属せざるを得ないわれわれの生活形式を再考することを目的としている。現代の日本社会において、かれらは環境保護という強いイデオロギーを帯びた、一種のマイノリティとして捉えられることが多い。しかし、本研究の調査を通じてみえてきたのは、かれらの動機や減量に対する思い、実践内容には多様性があり、必ずしも全員が特異な存在ではないということであった。たとえば、会社での経費削減を契機にごみ減量を意識した人もいれば、生まれ育った山村での自給自足的な生活を都市に出てきても辞められず、結果としてごみを減量し続けている人もいる。環境保護が提唱される大量生産・大量消費社会において、かれらの家庭や生活により身近な場におけるごみ減量という「抵抗」の実態が、そのコミュニティの外側に位置するわれわれ自身をも捉えなおすことへもつながるであろう。

キーワード：ごみ減量実践、環境問題、大量消費社会、啓発活動、マイノリティ

### 1. はじめに

#### 1-1. 環境問題とごみ問題

近年、環境問題が声高に叫ばれ、持続可能な社会の構築が求められるようになってきている。その一手段として、ごみ問題の解決が提唱されるようになり、解決に向けてさまざまな取り組みがおこなわれている。とりわけ、近年では持続可能な社会の実現に向けて、エネルギー需要を抑えると同時に、大量生産・大量消費社会を見直そうという意見や、その課題を克服するための活動が活発になってきている。

日本においてごみが都市問題となった記録が残されているのは江戸時代以降であり(稲村 2010a)、深刻化したのは1960年代の高度経済成長期以降といわれている。京都市の記録によると、1960年には1人1日あたりのご

みの排出量は227グラムだったが、その10年後には1,100グラムを超えた。また産業廃棄物の発生量も1975年以降に増加し、2007年度で年間約4億トン、一般廃棄物の発生量の約8倍もの量が排出されている(貴田 2010a)。ごみの増加にともない、1971年の東京ごみ戦争、1975年の六価クロム鉍滓事件などに代表される、公害としてのごみ問題が各地で発生した(稲村 2010b)。それに対応すべく1971年には、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律(廃棄物処理法)」が施行され、何度も改正を重ねている(稲村 2010a; 廃棄物学会編 2003)。また、1973年の石油危機を契機に、省資源・省エネルギー型社会への転換意識が高まり、国による技術的・経済的な検討がはじまるとともに、一般にも「リサイクル」という語が広がりはじめた(稲村 2010c)。さらに、1990年代になると地球環境問題への注

目も増し、ごみ減量、リサイクルの推進が促されるようになった。

ごみ問題は、量と質の変化というふたつの側面によって説明される。1人1日あたりのごみ排出量は、1950年と2000年を比較すると7倍以上にまで増加した。このごみの量の急激な増加により、処理場の確保が困難となった。焼却にともなうエネルギー消費量も増し、二酸化炭素排出量も増加した。また、ごみの内訳も大幅に変化した。家庭ごみ細組成調査<sup>2)</sup>によると、家庭ごみは大正から昭和初期までは土砂・陶磁器・灰や残渣がおもなごみであり、当然のごとくプラスチック類はなかった。しかし、現在では残渣が40パーセント弱、紙・セロハン類が30パーセント強、プラスチック類が15パーセントとなっている(いずれも湿重量比)。

2001年の使用用途別の家庭ごみ組成は、容積比だと容器・包装材が61.6パーセントにのぼる。材料別だとプラスチック類が43.4パーセント、紙類が40.5パーセントとなっている(高月 2004)。それぞれのごみ、とりわけ高度経済成長期以降にもたらされた新しいごみは、収集効率、燃焼処理、処理場の確保、再資源化のコスト高などの困難さを助長させている(高月 2004; 貴田 2010b; 京都市環境政策局 2010)。

このような事態を受けて 3R、つまり Reduce(発生抑制)、Reuse(再使用)、Recycle(再生利用)が提唱されるようになったが、近年の傾向としては、リサイクルの普及にともない、リデュースとリユースの 2R を強化する動きがみられている。リサイクル量も合わせた廃棄物総量、消費量そのものを削減しなければ、持続可能な社会は実現できず、それゆえにリデュースとリユースがより重要であるといわれている(山川 2010a)。

## 1-2. 人類学における環境問題・ごみ問題

従来、環境問題に関する研究は、自然科学や工学分野における研究が中心であった。社会科学分野における環境問題に関する研究が盛んにおこなわれるようになったのは 1990年代である。そのなかでも、ローカルレベル

での現地調査にもとづく、公害被害や環境破壊の研究において実績を重ねてきた環境社会学に対し、文化人類学はグローバルレベルを意識しつつ資源的な視点を得意としているといわれている(池谷編 2003)。また、資源とは現代社会において資源の枯渇などが問題化してから、資源の存在が初めて認識されたものではないという考え方がみられるようになった。資源人類学は、人間にとって資源とは何かという問題を捉えなおし、ものを資源とみなすことによって照らされる人間活動の意義を解明することをねらっている(内堀 2007)。

廃物資源利用の人類学的な研究は、過去にも少なからず報告されている。中央太平洋のキリバス南部タビテウエアにおいて調査した風間計博(2003)は、生業的食料生産が難しく、輸入食料に依存し、かつ流通基盤も不安定な環境における島民の廃物利用について論じている。タビテウエアの人びとは、使用後の空き瓶から漂流物まで徹底的に再利用するが、風間によれば、かれらの廃物利用は、島における植物資源の利用法にも共通するものがある。グローバル化に関わる議論ではしばしば、多くの事物や情報が在地の社会に流入し、均質化と「脱領土化」が進行することが強調される。しかし、ある文化に流入した「モノ」は受け手によって新たに意味づけされ、再文脈化されないかぎり受容は起こらず、局所的な差異がつねに生み出されると主張している。また、湖中真哉(2007)はケニア中北部の半遊動的牧畜民、サンプルにおける廃物資源利用を、その地域における家畜確保の優先や恩寵性原理によって説明できるとし、無価値だと廃物を切り捨てる思考は、人間によって作り出された社会的、歴史的産物である市場による価値づけの結果であると主張する。

## 1-3. 大量生産・大量消費社会に関する考察

現代の日本社会では、前述のとおり、質の変化や量の増加がごみ問題をより深刻化させている。たしかに、自身の生活を見渡してみても、われわれは日々多くのごみを出して生活している。それは高度経済成長によってもたらされた大量生産を推しすすめる社会の産

物だということができる。

言いかえれば、現代日本の大量生産・大量消費社会とは、たくさん生産され、あっという間に使用期限を終え、大量に破棄される社会である。いっぽうで、高度経済成長期以前の日本社会では、ものの生産量は少なかったが、途中で修理、修復を受けながら何度も使用され、最終的にどうにも使用できなくなってから破棄されることしかなかった。使用者が生活する場や期間において、ものは現在よりも多くの回数にわたって使用されるというサイクルを繰り返していた。

では、われわれ現代人がこの巨大な社会システムのなかで、大量にものを破棄することは仕方のないことなのだろうか。現代社会においても、ごみを削減しようと取り組んでいる人びとは少なからず存在する。かれらのごみ減量行為は、破棄されるものを少しでも減らし、ふたたび、ものの使用のサイクルに戻す活動である。かれらの取り組みは、捨てるよう強要してくる巨大な社会システムのなかにおいて、一種の抵抗であると考えられる。

本論文では、ごみ減量に取り組む人びとの実践と、かれらを取りまく社会の実態を明らかにすることで、現代社会の構造とその流れに従属する、その他大多数の人びとの生活形式を再考することを目的とする。環境問題が声高に叫ばれ、その解決の一手段としてのごみ減量が提唱されるいっぽうで、大量のごみを出さざるを得ないのが現代の日本社会である。そのような社会に生きる、ごみ減量に取り組む人びとの実践や思いを明らかにすることで、そうした実践の外側にいるわれわれ自身を捉えなおす契機としたい。

## 2. 調査方法

本調査は2011年7月から11月にかけて、京都市を中心とする関西各地に在住の個人や団体を対象に実施された。内容は、家庭や小団体レベルでごみ減量に取り組む人へのインタビュー調査、ごみ減量や環境問題に関する講習会やイベント等への参加・観察である。

また、インタビューで明確に判明しなかった部分については、インフォーマントが執筆、または取りあげられた雑誌記事をはじめとした、文献やその他の資料で補強した。

インタビューは、環境学習と環境保全活動が多く実施されている京都市の施設Eを中心にインフォーマントを探し、計10名に対して実施した。また、インターネットを用いた検索や、フィールドワーク先のイベントパネルをもとに調査協力を依頼した人もインフォーマントには含まれている。インフォーマントの概略は表1に示したとおりである。なお、ここで登場する個人名はすべて仮名である。

インタビューでは、調査者が詳細な質問項目を多く準備するのではなく、「ごみ減量に取り組むはじめた契機」や「具体的な減量方法」について自由に話してもらい、気になる部分をさらに詳しく質問していくという形式ですすめた。人によって時間の長短はあるが、インタビューの所要時間はおよそ1時間半から3時間を要した人が多い。なかには複数回にわたって話を伺った人もおり、さらにはご自宅に宿泊させていただいて、計10時間以上も話を聞かせてくれた人もいる。記録は筆記中心で、10人のうち2人のみ、ご本人の承諾のうえで談話を録音することができた。また、調査期間中には施設Eやインタビュー協力者が所属する団体の主催、共催のイベントなどへ計4回参加した。

## 3. インタビュー結果

### 3-1. 川田さん

川田さんは京都市内の施設Eで、館内の展示案内や催し物の企画をするエコボランティアの活動に2001年から関わっている。ボランティア活動自体に興味があった川田さんは、Eが自宅の近所にあつたので、退職後にボランティア登録をした。登録後の研修やボランティア活動を通じ、エコ意識が徐々に高まっていた。

川田さんはもともと、本社が関西にある製造業社に勤務していた。会社では製造コスト

表1 インフォーマントの概略

名前	居住地	年齢・性別	概略・おもな活動内容
川田さん	京都市	男性・70代前半	施設 E を中心に、幼稚園から小学校低学年を対象としたエコ教室の代表、環境家計簿リーダーなどを数多く兼任。ボランティア歴 11 年。
田中さん	宇治市	男性・60代後半	元鍼灸医、大学教授。退職後、ボランティア活動もしながら、家庭で出る生ごみを堆肥化し、家庭菜園に勤しんでいる。
池端さん	京都市	女性・60代後半	発泡スチロール箱を用いた余熱エコクッキングや省エネ術を講習会、メディアを通じて広める。施設 E を拠点としたボランティア歴 9 年。
横井さん	京都市	女性・70歳前後	施設 E における環境保護・啓発施設内の案内などのボランティア活動に参加。ボランティア歴 3 年。家庭でのごみ減量に特化。
岩本さん	京都市	女性・40~50代	京都市有形文化財にも登録されている町家住宅に在住。自宅の一般公開や催し物をおこないつつ、昔ながらの生活を継続している。
海野さん	京都市	女性・55歳	京都市内の環境市民団体の事務局長を務める。環境カウンセラーとしての資格も持つ。約 25 年前に京都生協でレジ袋削減運動をすすめる。
福永さん	宇治市	男性・69歳	夫婦で環境保全を説きながら日本縦断徒歩旅行を 2 度にわたって実行。ボランティア歴 8 年。
本田さん	神戸市	女性・61歳	独自の資源回収を月 1 回、自宅でおこなう。資源回収・古着のリメイク手芸グループの代表を務める。古着やハギレを再利用した手芸品を作り、数多くの賞を受賞。メディア出演、雑誌掲載など多数。
林さん	京都市	女性・68歳	京都市内市民グループ代表。コピーライター。容器包装削減のための風呂敷活用法を説き、全国各地で風呂敷を用いた包装ごみの減量術の講演会を開催する。出版物、メディア出演など多数。
小山さん	京都市	男性・30歳前後	自然農法食材を用いたカフェを経営。自身の畑で収穫した野菜や鳥骨鶏の卵をカフェで使い、カフェで出た生ごみを畑や鳥小屋に戻すというカフェー畑-鳥小屋の循環を確立。

注 個人名はすべて仮名。年齢も一部を除いて、インタビュー中の発言より推定

を削減するために、エネルギー問題に取り組んでいた。仕事をすすめるなかで、産業廃棄物の量の多さに驚くとともに、「ごみは金になる」ことを知った。ごみが増えると利益が圧迫される。当時は経費を削減するために、ごみの減量に取り組んでいた。

ボランティア活動を開始したところから調査・研究に関心があった川田さんは、施設 E における環境家計簿<sup>3)</sup>リーダーとしても活動している。環境家計簿に記録をつけ、ほかのメンバーの記録も回収、集計し、勉強会も開催している。また独自にも、自宅で排出されるごみの量を月単位で記録している。2011年9月分を参照させてもらったところ、夫婦 2 人家族で、1ヶ月分の可燃ごみは 3 回出している。総容量 95 リットル、総重量 6.0 キログラムであった。同様に、容器包装プラスチックごみは 2 回出し、総容量 85 リットル、総重量 3.1 キログラムであった。缶・びん・ペットボトルは 1 回出し、総重量は 6.2 キログラムであった。古紙も 1 回出し、重量は 19.7 キ

ログラムで、内容は新聞、雑紙、段ボールであった。この記録を 2003 年から続けている。

京都市の統計によると、2011 年度の 1 人 1 日あたりごみ量は約 488 グラムである。京都市内では私企業による集団回収システムが確立している古紙をのぞいて、川田家の 1 ヶ月分のごみを合計し 30 日分、家族 2 名で割ると 1 日あたり 1 人 255 グラムとなる。これは、京都市の平均値の 52 パーセントの量である。

川田さんは、手動式生ごみ処理機を用いた生ごみ堆肥化にも取り組んでおり、1 日につき 500 グラムから 1 キログラム程度の生ごみを処理機で堆肥化している。堆肥化した土は庭で使用している。この手動式の生ごみ処理機を使うと、生ごみが多すぎて処理機から溢れることもないし、ほぼすべてのものを「食べてくれる」。しかし冬季には、分解に時間がかかるため、生ごみを直接庭に埋めている。以前は段ボールを使用した堆肥化をおこなっていたが、1 日 2、3 回と頻繁に土を混ぜなければならないことがおっくうになり、手動式

の生ごみ処理機を使用するようになった。処理機を購入する際には京都市の補助<sup>4)</sup>を得ることもできた。この方法で堆肥化はじめて5年ほど経つ。「生ごみ堆肥化はごみのかさが減り、市にとっても喜ばしい。さらに庭の土を使って生ごみを堆肥化できるというメリットもある」。

川田さんが言うには、環境家計簿もごみ記録も、「記録する」だけに留まっていて、ごみを「減らそう」とはなかなか考えていない。でも、記録をはじめめる前と後では明らかにごみの量が減ったと感じている。「ボランティア活動で人に言うからには、自分もせんとね」。

環境家計簿リーダーや家庭での生ごみ堆肥化だけでなく、川田さんは幼稚園から小学校低学年の児童の環境教育活動にも取り組んでいる。子どもたちにエコ工作を通じて、ものを大切にすることを養って欲しいと語る。いっぽうで、ものを大切にすることに相対するのは、売る側の都合で企業の倫理・利益を大衆に押しつける社会であり、その究極形態が大量生産・大量消費ではないかと語る。「便利さの追求だけでなく、その便利さを実感して使って欲しい」。

### 3-2. 田中さん

田中さんは、もともと大阪府にある大学の教授であった。生理学が専門だったが、一般教養の授業として公衆衛生学を教えなければならず、生ごみや公害について自学していた。また当時、鍼灸の授業で学生が使った針は、そのまま可燃ごみとして破棄されていたため、焼却炉から大量の針が出てきて危険だと大学に苦情があった。それらのできごとから、ごみに対する関心が自然と高まっていった。

環境に関するボランティアに関わるようになったのは、近所に住み、同じくボランティア活動に携わる福永さん(3-7で後述)の紹介が契機だった。退職後の楽しみとして家庭菜園に挑戦したいが、土を購入するのも高価だと田中さんが悩んでいたところ、福永さんに生ごみ堆肥を勧めてもらった。堆肥化に使用する専用バケツや生ごみ処理機を購入する際には、川田さんと同様に、自治体の補助金を

得ることができた。自宅の庭で作成した堆肥を使い、緑のカーテンづくりや家庭菜園を営んでいる。また、みかんの皮などで作ったジャムや、だしを取ったあとの昆布で作った佃煮も試食させてくれた。

宇治市にも施設Eの支部局となる団体があり、田中さんと福永さんはそこを拠点としてボランティア活動に取り組んでいる。主な活動内容は、エコや省エネに関する相談受付、環境教育、展示パネル作成などである。

ごみ減量は、「節約」と思うと窮屈になってしまう。「楽しいから続けられる」と語る川田さんだが、いっぽうで、現在は退職後ということで、「時間があるからできるんですよ」と言っていたことも興味深い。

### 3-3. 池端さん

京都生まれで、京都市育ちの池端さんは、1968年3月に結婚し、姑と大姑から、もったいない精神——ものを大事にする心を受け継いだ。

1960年代からの大量消費・大量生産・大量破壊社会の進行にともない、周囲の環境が悪化した。1971年に起きた明治乳業のヤシ油入り牛乳事件や、日々ごみで汚れていく近所の疎水を見て、豊かになるいっぽうで、環境の悪化を池端さんは感じていた。第一子を出産したのち、「子どもにはいい環境でいい食べ物、いい文化を与えたい」と思うようになり、1972年に生協へ加入し、共同購入を開始した。それと同時に生協の共同購入者と環境の勉強を開始した。

池端さんは、2003年より施設Eにおけるボランティア活動に参加している。過去にテレビ出演の経験も多数ある。発泡スチロール箱を使用した予熱利用のエコクッキングを考案し、2006年にはそれが環境を保全する先進的な取り組みと認められ、京都市で表彰された。エコ指導者として心がけているのは、「基本的には自分で実践してうまくいったことしか人に教えない」ことだ。

池端さんは施設E内だけではなく、出前講座も通して、小学校の低学年から大人まで、環境問題に関する知識からエコ工作、エコクッキング、ごみ減量方法など、幅広く指導し

ている。「ごみ減量というけれど、エコクッキングやエコ工作など、こういう作品を作って楽しんで！」と訴える。講話するときも暗い話をニコニコと話すように心がけている。「『楽しんでやる』ことが大事。ケチでもったいないという暗くて重いイメージを消したい」と笑顔で話す。

池端さんは、現代の日本社会について、ごみを出さざるを得ない社会が変わらなければならないと思うが、「社会が変わらなくても、消費者も声を上げれば変えられる」と言い、以下のようなエピソードを例示してくれた。ある日、池端さんがスーパーの精肉売り場で肉をトレーではなく、ポリ袋に入れるようお願いすると、次の来店時にはトレーかポリ袋かを選べるようになっていた。また同じ店舗では地産地消の要請を出したら、京都周辺で収穫された野菜を店頭で置いてくれるようになった。正月やお盆など、親戚一同が集まる時には、家にある大皿を持って魚屋へ行き、盛り合わせを注文することもある。そうすることで、食品トレーを削減できるだけでなく、中身を別の皿に盛り替える手間も省くことができる。「社会システムが変わらないかぎりごみ問題の解決は難しいが、やはり一人ひとりが考え方を変えることによって効果がある。自分からできることをやっていくのがいいのではないだろうか」。

ボランティアの活動歴も長い池端さんは、京都市の環境問題啓発パンフレットの作成に携わることも多い。啓発パンフレットやテキストに関して、「一気に減らすわけにはいかなから、徐々に減らすための方法を提案するために作成している。2Rを普及させて、若い世代にいい環境を残すために。大人ができて悪いものは悪いと認めて、これからの減量をする必要がある」。

### 3-4. 横井さん

横井さんが施設Eにおけるボランティアに登録した理由は「環境は生きていくうえで切り離せないから」であった。広島県にある山村の出身で、実家は車も通れないような道の先にあった。幼少期の生活は、生ごみや人糞

は肥料に、水も集落内で循環させる自給自足を基本とした生活だった。18歳のときに単身で京都へ出てきたが、故郷とはまったく違う都市での生活にショックを受けた。学生時代の寮生活では、ほかの寮生は醤油のかけすぎなどを寮母さんに注意されるいっぽうで、横井さんは一度も怒られたことがなかった。

大学を卒業した後、公務員として就職し、初任給でラジオを買った。1960年代から半世紀以上そのラジオを使っていたが、最近になってとうとう故障してしまった。それほど古いと部品も調達できず、修理してもらおうと店舗に持参しても取り合ってもらえなかった。しかし、ボランティア仲間で修理できる人がいたので、修理してもらい、現在でも使用している。腕時計も同じものを40年以上使いつづけている。

育った環境での習慣はなかなか抜けないのか、結婚後もごみを減らそうとするため、京都生まれ京都市育ちの姑から「あなたといると疲れる」と言われつづけた。姑から「お米ぐらいたくさんあるんだから、少しぐらい捨てても大丈夫」と言われたこともあったが、横井さんにとっては許せないことだった。「面倒くささともったいなさでは、圧倒的にもったいなさが勝る。幼いころからの教育があったから、周りから冷たい目で見られても、辛くても減量し続けた」。

現在は夫にも夫の両親にも先立たれ、息子も独立して一人暮らしをしている。現在のごみの量は1ヶ月に5リットルごみ袋が2つあれば十分だ。今でも人のごみが気になってしまう。いっぽうで、時間があるから減量に取り組むことができるとも感じている。

横井さんはインタビュー中に今の自分のライフスタイルに影響を与えた父について言及した。父がつねに言っていたのは「ボロは着てても心は錦」だった。着飾ったり贅沢するよりは、たとえ質素でも心が豊かな方がいい。そうあるようにと言われて育った。また「お金を費やすなら身の回りを磨く物ではなく、本など頭のなかを磨く物に費やせ。そうすれば泥棒に取られる恐れもない」と言われていた。「ものを大切にしていたら、自然とごみ



という現代の商法とは別物だ。

### 3-6. 海野さん

海野さんは、1987年に設立された、情報の発信と人的交流を通じての環境教育を目的とした市民グループの事務局長として活動している。この団体のおもな活動は、環境保護を訴えたカレンダーやマイバッグなどの制作、子どもを対象とした環境人形劇や紙芝居の上演などである。

海野さんは1956年生まれ、育ったのは高度経済成長期の真っ盛り、公害の時代であった。そのなかで海野さんは公害に対して反抗、怒りを心のどこかで感じ、「なぜ人間はこう平等でないのだろう。人間は安心して暮らせる平等な社会でなくては」という思いを、心のなかに秘めていた。

海野さんは結婚し2人の子どもに恵まれ、子どもに与えるものは、服からおやつまですべて手作りするほど、育児に専念していた。自宅は京都市の自動車交通量の多い地域にあり、排気ガスによる子どもの肺への悪影響を恐れた海野さんは、せめて食べ物だけでもいいものを食べさせたいと思い、無農薬・無添加物の食材を求めて、京都市内を毎日走りまわっていた。そんななか、疑問を持ったのがレジ袋の存在であった。ノートひとつを買ってもついてきて、台所の隅から貯まって溢れてくるレジ袋に対し、主婦の第六感で「これもプラスチックであり、化学品。作るときも燃やすときも悪いものが出てきているはずだ。おかしい!」と感じた。次男が小学5年生に進学したのを契機に、主婦仲間7人と生協においてレジ袋削減運動を開始した。海野さんにとって初めての家の外で活動だった。同居していた姑に「主婦が外に出るなんて」と嫌味を言われたり、生協の店長に脅すような口調で猛反対されたりと、直面した困難も多かったが、店の売上を単位面積あたり関西一にし、レジ袋有料化が実現するまで、精力的に活動した。

ところが、「最初は申し訳なさそうに5円払っていた客も、今は5円なんてたいしたことがないという態度だ。たとえ有料になっても、

それがたいしたことのない額だと思っている間はごみは減らない。30から40円(京都市の有料ごみ袋の1枚分の値段)でも、もったいない、地球を壊す!と思うかどうかだ」と、レジ袋有料化の効果が薄れてきていることを懸念する。リサイクルが普及したことを喜びつつも、リサイクル「さえ」すればいいと思っている人がまだたくさんいるのは問題である、と海野さんは考えている。「まずは2Rが大事であり、だからもっともっと啓発していかなければならない」。

また、食べ物や衣類、工芸品も、「生産者と消費者が『目の見える関係』でいたい」と海野さんは考えている。「世の中の品物すべてが小さな循環をしてくれたら、ものへの思い入れが変わってくる。あの人が作ってくれたと思うだけで細胞が生き生きする。なんでも大きくなると遠くなる。見えなくなる。世界は大きくなってきている。多国籍企業は恐ろしい。労働力が安いところに工場を求めていくのは人権無視だ」と、世の中のシステムを変える必要性を語った。

さらに、海野さんは次世代にいい環境を残すことの重要さと、そのために個人ができることについても言及していた。「失敗は失敗として認めて、今後の教訓にしよう」。そのために変わるべくは社会と個人の両者であり、個人が自分の意見を発言することがまず必要で、社会も行政など核になる人たちは広い視野を持って施策をきちんと決めてもらわなければならない。「日本は市民がおとなしすぎる。私のような主婦も、言えない人も言えないなりに言わなければならない」。

海野さんはマイバッグやマイ箸を普及させる啓発運動をし、自身でもマイバッグやマイ箸を使用したり、ネギの根やニンジンの頭を水につけて栽培したりと、減量に取り組んでいる。とは言え、実際にはなかなかごみの量を減らすことができていない、と海野さんは告白する。2人の家族分と市民団体のごみで、週に30リットルぐらい排出してしまう。市民団体の会報を作っていると、どうしても紙ゴミが多くなってしまおうそう。



### 3-7. 福永さん

田中さんと同様に、宇治市で環境ボランティアとして活動している福永さんは、2004年3月から7月、2010年3月から8月の二度、夫婦で日本縦断徒歩旅行に挑戦した経歴をもつ。一度目の旅行ではごみ減量、ポイ捨て自粛について、二度目の旅行では省エネについて道中訴えながら歩きつづけた。このような旅行にしたきっかけは、退職後に夫婦で行った四国「歩き遍路」の道中で、ポイ捨てごみや不法投棄された産業廃棄物の山を目の当たりにしたことだった。「経済発展のしわよせが、ゴミの増加とモラルの低下という形で社会をむしばんでいることを思い知らされました」(著書より引用)。

四国遍路の次には日本縦断旅行をしたいと夫婦で思うようになったが、何か目的を持った旅にしたいと思い、環境保全を訴える決意をした。その後、施設Eや海野さんが事務局長を務める市民団体などで環境問題や教育・学習について学んだ。道中では手作りの四輪カートに備品や衣類を積み、日本列島徒歩縦断と環境保全を訴える幟を立てゼッケンを着て、鹿児島島の佐多岬から北海道の宗谷岬まで118日かけて縦断した。

徒歩旅行の道中では、学んだ知識をもとに自作したゴミクイズをしたり、メッセージカードを配布した。宿泊は民宿を利用することもあれば、テントを立てることもあった。道中の記録は自身のブログで毎日のように報告した。一度目の縦断旅行の記録は本としても出版されている。徒歩旅行は夫婦だったから達成できた旅行だ。ごみ減量とポイ捨て自粛を訴えるという目的を持つことにより、自己矛盾や孤独感に陥ることなく、日本縦断を達成できた。

最近ではごみ減量より省エネ関係の活動が多い。自宅で緑のカーテンや省エネメーターを用いた使用電力チェックをおこなっている。このことは、二度目の縦断旅行で省エネを訴えて歩いたということとも関係している。筆者が自宅を訪問したときは、自作のキャンピングカーを見せてくれた。ソーラーパネルが設置しており、後部では湯沸しなどが可能だ。

「ごみも省エネも完全に独立した問題ではなく、相互に影響し合っている」と福永さんは語る。最近では、福永さんは省エネアドバイザーとしても、京都府内の事業所で省エネ実践を指導している。

### 3-8. 本田さん

手芸家として数多くの賞を受賞するなど活躍し、かつ資源回収の市民団体の代表を務めた本田さんは、徹底した減量と啓発活動に取り組み、各方面で活躍中だ。

本田さんは1950年生まれ、兵庫県の出身である。母は神戸市にあるヨーロッパ人の駐在人の家に務めるコックをしていた。食事中お皿に残ったソースをパンにつけるなど、食事後のお皿がきれいになるような食事の作法は母親譲りだ。ナイフに残ったバターはパンに差し込むときれいに最後まで食べることができる。食材も極力、厨芥ごみを出さないよう、徹底的に使い込んで調理している。

本田さんは、地元の国立大学教育学部の体育科に進学したが、当時は大学闘争の全盛期だった。大学の授業が大学闘争のため長期休講となり、その間に大阪万博のオーストラリア館で働いていた。万博でパッチワークと出会い、古着や端切れを使用して独学で作品を作りはじめた。

1970年、本田さんは20歳のときに学生結婚した。当時、夫は22歳、就職して間もないころで、金銭的に厳しかったため、家にあるものを徹底して使うようになった。「とことん使いつくす結果としてごみが出ないだけだ」。1ヶ月2万から3万円で生活するという当時のライフスタイルは、たとえ収入が増えても変わらなかった。結婚した直後は、古着の糸も解いて手芸の縫い糸として使用していたほどである。「綿も栽培してから紡いで糸にしてくれた人、織って布にしてくれた人がいる。綿花が糸になり、布になり服になったと考えると、大事にせざるを得ない。ものへの愛着があるから、作品へと生まれ変わる」。

「古着や古靴下は新品の布と肌触りが違う。数十年前に作った作品であっても、材料がもともと何だったか今でも鮮明に覚えている」

と語る本田さんの自宅では、家族のズボンや学生服が形を変えたクッションやマット、キルトなどが多く使用されている。糸くずはクッションや縫いぐるみの中身に、首元などについたタグもパッチワークしてクッションに使用する。

服の端切れなど廃材のみを材料とした本田さんの手芸は、雑誌などにも多く取り上げられた。そのようななかで「ごみが出ない」と環境学関係者に注目されるようになり、本田さんは環境関係の市民団体でも活動するようになった。施設Eにおける活動と協働することもある。それらの関係でモンゴルでの研修にも参加したことがある。ワイシャツをリメイクしたエコバッグをたくさん作り、現地の人に配布した。

家の収納スペースには、ダンボール箱を装飾した収納ボックスや、焼酎の紙パックを切って作った引出しの仕切りなど、創意工夫と再使用の精神がおおいに見られる。

容積が大きい容器包装プラスチックごみは、30リットル袋に3から5キログラム詰め込む。ひとつひとつをごみ箱に入れる前に空気を抜いて五角形に折りたたむことで、容積を格段に凝縮することが可能だ<sup>5)</sup>。またアルミ箔やアルミ包装も別々に回収する。同じ容器包装プラスチックでも、中が汚れているもの、野菜の袋など穴のあいているもの、などといった細かいごみの分別は、一つのごみ箱に複数ポリ袋を入れることで、別に保管している。

徹底的に分別したものは、本田さん自身が立ち上げた市民団体で独自に回収している。厳密に分別することで、「資源」として別のかたちで使用することができる。この回収ルートは30年以上にわたって続いている。市から指定された方法でごみを回収する自治連合会とは完全に別の回収を実施しているため、自治会と衝突したことも多々あった。しかし、この活動が30年以上ものあいだ続いてきたのは、本田さんと回収業者との関係の良好き、途絶えない参加者と本田さんの熱意があるゆえであろう。

「ごみとは人間のなかにだけある概念。不要だと思わなければごみは出ない」。使用で

きるものは手芸の材料などと用途を変えたり、またそのままでも最後まで使いつくす。「ごみは見えるところに置くべきだ。蓋をして終わりではなく、見えるところに置いて付き合うべき。使い終わったから終わりではなく、いかに別の方法で再利用するか、どうしても捨てなければならないときは、いかにコンパクトにするかが大切だ」と語る。「長く使えるということは、有効なことだ」。

本田さんは、一般的に廃棄されてしまうようなものでも、繰り返し長く使う工夫を凝らすことに楽しさを感じている。工夫しだすと次から次へと知恵を絞り出すのが楽しくなる。ものづくりに関しても、本田さんは以下のように語っていた。「作るか買うか。作ることができない人は買うしかない。けれど長年使えるいいものは高価なのは当然だ。今は安い輸入品もたくさん出回っているが、安いなら安いなりのリスクは負うべきだ」。

### 3-9. 林さん

林さんは現代に風呂敷を日々の生活で使うことを普及させようと活動する、市民グループの代表である。

1970年代以降、ごみを出して当たり前暮らしになってきたが、林さんはそこに強い疑問を感じた。食品トレーに林さんは抵抗を感じ、スーパーでも肉はずっと包装紙にくるんでもらっていた。その方が自分の精神衛生上いいと林さんは感じる。ご主人とともに、世代的に捨てることに抵抗がある。結婚して10年はシンプルライフを送っていたが、時が経つにつれてものや商品がじわじわと増えてくることに抵抗を感じていた。

林さんが風呂敷を使いはじめたきっかけは、紙袋やレジ袋への抵抗というよりも自分の美観を大事にしたかったからだ。「風呂敷は美しい。マイ箸への思い入れも風呂敷に近い。無機質なトレーなどとは違う」。その契機は、24年前に京都へ引っ越してきたころのことだった。表・裏千家が近所にあったため、和服姿の人が風呂敷を使っていたのを見て美しいと感じた。また同じ時期に、こたつ布団を購入した老舗の布団屋で風呂敷をもらった。

はじめて風呂敷を使用したのは銭湯に行くときだった。最初は緊張し、周囲の目が気になって仕方なかった。

その後、林さんは風呂敷メーカーや友人に協力依頼し、風呂敷のよさを広める市民グループを設立した。活動内容も、次第に風呂敷の使い方に関する書籍を出版したり、講演したりなど拡大した。最近ではメーカーや企業のEPR<sup>6</sup>が問われるようになり、レジ袋削減や3Rへの関心が高まってきた。そのなかで、レジ袋減量のための風呂敷袋の話をしてほしいという講演依頼が来るようになり、全国あちこちで講演している。

「人間は自分のライフスタイルを一人ひとりが考えなければ、創造性・工夫を失ってしまう」。人間の良さは知恵を持ち工夫できるということのはずなのに、近年の、あてがわれたものをそのまま使う風潮に林さんは疑問を感じている。「不便かもしれない、時間もかかるけれど、そのような創意工夫を失わない暮らしの方が楽しいし、人間らしい」また食品に関しても、現代のスーパーに並んだ多種類の調味料に疑問を感じる。1970年代までは醤油、酢、砂糖などの基本的なもののみを市場で購入し、ドレッシングなどその他の調味料は自分で作っている。

「ペットボトルもレジ袋も現代人には必要なもの。ゼロにはできない。けれどできるだけ買わないように、またもらわないようにしている」講演などで遠方に出かけることが多い林さんは、どうしても駄弁を買って食べることもあるし、講演会場ではペットボトル入りお茶を出されるそう。けれど紙おしぼりも割り箸もペットボトルも、なるべくリユース、リサイクルするように心がけている。

また不要なものははっきりと断ることが重要だ。林さんの場合は、それがレジ袋やドレッシングだった。「人に自分の価値観を押しつけることはできないし、押しつけないけれど、それぞれが自分に必要なもの、必要でないものを見きわめができるかどうか、また必要でないものは断ることが大事だ。人間の欲望は有限であることを人は知るべきだ。食にせよ人間関係にせよ時間にせよ、自分が

実現できる欲望の枠は意識する必要があるのではないか。ものに振り回されず、自分の価値観を大切にすることが大事だ」。また「日本は先進国でもものが溢れている。対にあるのは、紛争や飢餓で苦しんでいる世界。私たちはもので溢れた先進国で何ができるのだろうか」とも言及していた。

ごみも、今できることをみんながちょっとずつすれば減る。林さんは努力した意識はない。「エコ」意識が高いと言うと仰々しく考えられているけれど、大事なものは「無理しない」と「美しさ」を求める価値観であるという。

### 3-10. 小山さん

「ぼくの場合は、全部自分で作りたいから一から作っていて、その結果ごみが出ていないだけです」と語る小山さんは、自らが自然農法で栽培した食材を使用した料理を出すカフェのオーナー兼シェフである。富山県の出身で、育った家は築100年以上のあちこち改装された家だった。幼少期の小山さんは、家の中の変えなくてもいい場所を利便性の追求のため変えていくことに疑問、反感を持ち、同時に昔ながらの家への憧れを抱いていた。

小山さんは料理学校で料理を学び、卒業した後に飲食店で働いていたが、包装された加工食品に少し手を加えて客に出すだけの飲食店の形態と、大量に出されるごみに疑問を持ち、退職した。その後、農家・牧場で働き、農業や家畜飼養を学び、京都へ移住した。

上洛した当初は、小山さんは高級フレンチ料理店で働いていた。その店では加工食品は一切使用されていなかったが、大量の材料をふんだんに使い、客に食べてもらうのはごく一部という「こだわると、さらにごみが増える」という事実を目の当たりにし、再度疑問を持つようになった。その後、あるきっかけで畑をはじめることになり、畑で収穫できたものを使った料理を出すカフェを2009年に開業した。畑ははじめて3年になる。鶏小屋は2年目で、今は3羽の烏骨鶏を飼育している。

カフェ・畑・鶏小屋の循環システムは以下

のとおりである。まず、畑で収穫した野菜はカフェにて調理、消費されるが、厨芥ごみは畑に埋めて、畑の肥料になる。厨芥ごみは鶏小屋にて烏骨鶏の餌としても使用される。鶏小屋の卵は、野菜と同様にカフェの食材として提供される。畑で出る雑草や野菜くずは、厨芥ごみと同様に烏骨鶏の餌となる。また、烏骨鶏が出す鶏糞は畑の堆肥となる。3つの場所で、みごとな循環システムが確立されている。

野菜は皮や種まで無駄なく調理する。これは野菜などを皮や種も含め全部食べて、全部吸収することによりすべての栄養を得るというマクロビオティック<sup>7)</sup>の考えにもとづいている。かつ、地産地消と「捨てたくない」という思いが付加されているだけだ。また、人びとの間には実は食べられるものでも「捨てなくてはいけない」という先入観が埋め込まれてしまっていることが多い。「たとえばピーマンの種や蒂も食べて欲しいからそのまま調理して出すけれど、客に残されることも多い」。

カフェでは食材も徹底的に食べつくすので、1日が出る厨芥ごみは小鍋にほんの少しである。畑や鳥小屋だけでは手に入らない材料は購入するが、小山さんにとっては購入すると出てしまうのが「ごみ」である。土があるとごみは減る。可燃ごみは1週間に5リットル袋で1袋分しか出さない。カフェでは食べられるものはほとんど食べつくす。事故で死んだ烏骨鶏も、埋めるのがもったいなくて食べてしまったほどだ。「工業的になればなるほど効率的にはなるが、ごみは増えるし、エネルギーや化学薬品が多く使われている」。

小山さんにとっては、畑もカフェも「楽しいからやる。続けられる」ものである。カフェで利益を上げたいという欲求はさほど強くなく、「今のペースでやれたら十分だ、そこまで忙しくならなくても大丈夫だ」という。カフェの顧客層は30代が多い。類は友を呼ぶのか、小山さんの考えに共感する人が来てくれる。常連客が多い。「エコだとかごみ減量だとか言う『いいことをしている』という意識を持った人が多いけれど、自分は自分がやっていることを他人に強制しようとは思わな

い」。

#### 4. 分析: ごみ減量の多様性

##### 4-1. 動機づけと実践内容の多様性

ごみ減量実践者の動機づけは、一般的には「地球環境に悪いからごみを減らす」と考えられがちである。だが、全員がそうではなさそうだとすることが、インタビューを通じて浮びあがってきた。ここでは、生活のなかでさりげなくごみを減量している場合を内発的な減量、個人やメディアもふくめ、他者の影響が動機付けに影響している場合を外発的な減量とし、分析を深めたい。

ただし、外発的な減量も、外発的な要因に依じて、以下の三種類にわけられると考えられる。それらは、1)ボランティア活動中の啓発活動など、「環境のため」という周囲からの働きかけ、2)親や姑など、先代からの教え、3)生活環境が汚れていくことに耐えられなかったという、環境そのものからの働きかけ、の三つである。1)と2)の違いは、「地球環境を保護するため」という考えが先行しているかどうかによって区別される。たとえば、川田さんは施設Eにおける、環境保護を目的としたボランティア向けの研修を機会に、ごみ減量に取り組むようになった。いっぽうで、横井さんは自給自足的な農村での生活、そこで育った親からの教えが、現在のごみ減量実践に影響している。また、環境そのものからの訴えとしては、池端さんのインタビュー中にあげられた、日々ごみで汚れていく近所の疎水を見て、豊かになるいっぽうで、環境の悪化を感じていたと意見や、四国遍路の道中で不法投棄されたごみを目撃したことが契機となった福永さんの例が挙げられる。

すべてを手作りしたい小山さん、林さん、経済的な困窮から減量をはじめた本田さんの動機は内発的な減量と言えるであろう。外発的な減量の動機が主で、そのうち1)の傾向が強いのは川田さん、田中さん、2)の傾向が強いのは横井さん、岩本さん、3)の傾向が強いのは海野さん、福永さんとなるであろう。し

かし、汚れていく疎水を見て環境の悪化を感じ、かつ姑や大姑からもったいない精神を受け継いだという池端さんのように、ひとりの人の動機づけが一概にどのようなタイプと区別できるとは限らない。むしろ、各人の単数また複数の動機づけが、内発的、外発的、外発的のなかでも 1)~3)のような傾向があると考えの方が適切であろう。

では、各インフォーマントの実際の行為はどうだろうか。今回インタビューした 10 名のインフォーマントのなかでも、徹底的なごみ減量に取り組む人、自身も減量し、ボランティア活動や講座をとおして周囲へ啓発もする人、活動へは積極的だが、自宅ではごみをあまり減量できていないと告白する人がいることが、インタビューのなかからうかがえる。徹底的なごみ減量に取り組んでいるのは本田さん、小山さん、池端さん、横井さんの 4 人だが、講座を開いたり取材を受けたりして活動する本田さん、池端さんの 2 人は啓発活動にも積極的に取り組んでいる。いっぽう、自分の考えを人に押しつけないと語る小山さんは、人に減量するよう啓発することはあまりないと考えられる。

また、内発的にごみ減量をはじめた本田さんの啓発活動が、彼女が初代代表を務めた市民団体に所属する人のごみ減量をはじめた契機となるなど、内発的な減量実践者による啓発活動が他者の外発的な動機づけとなることも考えられる。

さて、各人の動機づけと実践内容を比べると、内発的な実践者は、工夫を凝らし徹底的に減量している人が多い。逆に、外発的な実践者、とくに「地球環境の保護」のために減量する人は、あまり減量できていないという人が多い。この理由は、減量すること、もしくは減量しようと周囲へ訴えかけること自体が、活動の目的となってしまっている可能性もあると考えられる。

#### 4.2. ライフヒストリーとの関わり

ここで、もうひとつ考慮に入れなければならない尺度が「時間」である。ごみが社会問題となるまでには長い歴史の変遷があり、と

くにここ半世紀ほどで大きな変化があった。この時代の流れに、インフォーマントのライフヒストリーを当てはめて考えていきたい。表 2 は、戦後のごみ問題の変遷と、各インフォーマントがごみ減量をはじめた契機となったできごとや、ごみを意識しはじめたと推定される時期を表したものである。誕生年、結婚年は、インタビューから推測できたものは西暦を表記した。また、ひとつの目安として 5 年ごとに京都市の 1 人 1 日あたりのごみ排出量も記入した。

リサイクル運動など環境に関する啓発運動は、「有限な資源を大切に」や「地球が危ない」などのキャッチフレーズとともに、くり広げられていることが多い。現在でも、ごみ問題は環境問題の一部として位置づけられているため、実際にごみ減量に取り組む人びとは、ごみが増えると地球に悪影響を与えるという理由のみで減量していると推測されるかもしれない。しかし表 2 のとおり、ごみが公害として広く一般的に知られるようになった 1971 年の東京ごみ戦争以前からも、ごみを出さない生活を続けていた横井さんや池端さん、本田さんなどの例から、インフォーマント全員が、ごみ処理が社会問題となってから実践を開始したわけではないことが指摘できる。

## 5. 考察

### 5-1. 「コミュニティ」としての場

前章のとおり、ごみ減量実践者のなかには啓発と実践のずれが生じている人がいる。同時に、インタビュー内容と照合すると、啓発も実践も取り組んでいる人は、地球環境と日常生活が、自身のなかで直接結びついていると考えられる発言がみられた。その例として、「2R を普及させて若い世代にいい環境を残さなければいけない」、「自分が身をもってわからなければ、環境問題への意識は変わらない」などの発言が挙げられる。実際に啓発運動をしている人たちは、施設 E や市民団体などを通じて活動している人が多い。各団体は共同でイベントを開催したり、たがいの結び

表2 ごみ問題の変遷とインフォーマントのライフイベント

年	社会的事件	1人1日あたりごみ排出量(グラム)*	推定されるインフォーマントのライフイベント
1945	敗戦	38	
1950		222	横井さん(事例4)誕生 山村生活開始
1953	朝鮮戦争→特需		
1955		233	
1960	高度経済成長期に突入	227	横井さん就職 63 池端さん(事例3)結婚
1965		538	
1970		1,136	70 岩本さん(事例5)誕生 70 本田さん(事例8)結婚
1971	廃棄物処理法施行 東京ごみ戦争		林さん(事例9)ごみ減量開始
1973	第一次石油危機		
1975	六価クロム鉍滓事件	914	
1980		1,013	海野さん(事例6)結婚 小山さん(事例10)誕生
1985		1,070	
1986	バブル景気の開始→ごみが再び増量		
1989	青森事件		
1990	地球環境問題への注目が増す	1,331	
1991	廃棄物処理法改正		
1995	容器包装リサイクル法制定	1,464	海野さんレジ袋削減運動
1997	京都議定書採択		福永さん(事例7)四国巡礼
2000	循環型社会形成推進基本法など制定 循環型社会構築へ	1,523	01 川田さん(事例1)ボランティア開始 福永さんボランティア開始 04 福永さん日本縦断徒歩旅行へ
2005	容器包装リサイクル法改正	1,284	田中さん(事例2)ごみ減量開始
2006	第二次循環型社会形成推進基本計画		
2008	3R・低炭素社会の提唱開始		
2010		924	09 小山さんカフェ開店

\* 京都市環境局(2002)。京都市勢統計年鑑(1951-1961)、京都市統計書(1966-2011)をもとに算出

つきも強く、情報なども活発に交換されている。ここではこれらの団体のことを、ごみ減量に取り組む人びとの集団、すなわち広義のコミュニティという語で表現し、その性質について考察したい。

今回インタビューした10名のインフォー

マントのうち、8人は京都市内外でボランティアとして環境啓発活動に取り組んでいる。ボランティアをはじめた契機はさまざまだが、かれらは施設Eにおけるボランティアを対象とした研修会などで、環境に関する知識を身につけていく。これらの知識は、現代日本の

環境対策として広く提唱されていることである。このように、これらの市民団体には環境対策に関心が高い人が集まる仕組みがあり、さらに集まった人どうしのなかで、地球環境に対する共通知識が、ある程度共有されると考えられる。

また、町家住宅に住み、昔ながらの生活習慣を続けてきた岩本さんや、経済的な困窮を理由にはじめたリメイク手芸を続けていた本田さんは、自身の生活習慣が環境学者や環境保全団体などから注目され、連携するようになった。このように、ごみ減量コミュニティには実践が先行していた人びとが、「吸収」されるかたちで所属するようになることもある。

しかし、ある程度の共通認識が存在するといっても、いざ実際にほかのごみ減量実践者とともに活動するときには、それぞれの思いが小さな衝突を引き起こすこともあり、今回の調査中にもそのような衝突を垣間見ることができた。たとえば、川田さんや池端さんが所属するボランティアのグループが主催となり、小学生を対象としたリメイク教室を開催したことがあった。この回では川田さんが中心となって動いていたが、男性は一人でも多くの子どもに参加してもらいたいため、時間制で区切って2教室開催する。よって、時間を短縮させるために、材料にあらかじめ切りとり線を入れたりなどの下準備に相当な時間を費やさなければならない。しかし、池端さんが主催するときは、材料となる牛乳パックなどを各自家から持ってきてもらうそうだ。池端さんは、子どもにあえて時間のかかる作業をさせた方が、かれらにとって勉強になると考えているが、「男性はそうは思わないみたいでね…」と後日語っていた。限られた教室の時間のなかで、人数を優先する川田さんと内容にこだわる池端さんの思いの違いがみてとれる。やはり各人のバックグラウンドの違いは、たとえエコボランティアへの教育というシステムのなかにおいても、完全に均質化されるものではない。

いっぽうで、インタビュー中には、自分たちの減量行為が他者にどう思われているかということに関する発言も多くみられた。減量

を徹底しすぎて、姑から「あなたといると疲れる」と言われていた横井さん、「ケチでもつたないという暗いイメージを消したい」と語る池端さんなどの発言がそれに該当する。ごみ減量の大切さを訴えて活動をしている人も、その思いがなかなか広く一般的に受け入れられないことを自覚しているようだ。

外部にいるわれわれの目からみると、この「ごみ減量コミュニティ」という社会的カテゴリーはある種の「マイノリティ」的性質を帯びていると感じられるのではないだろうか。そして、内部の人たちも同様に感じているのではないかと筆者には思えるのである。

さらに思弁をすすめると、こうしたマイノリティ性は以下の三点から発生していると考えられる。第一に、かれらの発言のなかには、環境問題と関連して、日常生活の話と地球規模の話が混在していることが多くみられる。日常と地球がリンクしているからこそ実践が伴っている人もいるが、このような考え方にみられる具体性、現実性から間接的な知識や表象への飛躍が、外部の人間には理解されにくいところだろう。

つぎに、かれらの行動は、独自のごみの回収ルートを自治会と対立してでも維持し続けたりなど、もともと存在する社会システムを変化させようとするものである。それは大量生産・大量消費社会というシステムそのものを変えなければならないという複数の声からもうかがえる。このような発言には、社会を根本的に変革しようとするものだ、一般大衆からは思われることもある。

しかし、ごみ減量に取り組む人びと全員がそのような思想を持っていると、外部から一方的に決めつけてしまうのは大袈裟ではないかということが、前章で分析した多様性からみえてこないだろうか。ここで、もうひとつ注目したい複数意見は「楽しんで」減量しているという声だ。「地球が危ない」という強迫観念に駆られて減量しているのではなく、エコ工作やプラスチック包装の圧縮方法などに工夫を凝らすことへの楽しさ、生ごみ堆肥を使用した家庭菜園の楽しさなど、それぞれの人が楽しみながら減量しているということ

ある。また「意識して無理に減らそうとは思っていない」という発言も興味深い。かれらは、大量生産・大量消費という生活スタイルが広く一般に普及していくなかで、昔ながらのライフスタイルを維持し続けたり、大量生産によって普及した製品を一部受容しながらも、それらを手軽に入手・破棄できることに疑問を抱きつづけたがゆえに、さほど意識しなくても減量できてしまうのかもしれない。さらに、今回インタビューした人びとのなかには、「自分の考えを他人に押しつづけたくない」と発言している人もみられた。「ごみを出さない」という自分の意思は強く持っていますが、それを他者に声高に訴えるかどうかはまた別の話であり、全員が確信的に他者を巻きこもうとしているとは限らない。

「ごみ減量に取り組む人びと」に対し、これまでの外部者の人びとは、かれらの思想の特異性と、生活スタイルの変革をともなう行動がゆえに、取り組む人たち全員の考え方が飛躍的で少々過激だととらえ、ステレオタイプに括ってきたのだろう。しかし、全員が地球を過度に意識しているわけでもなければ、他人に考えを強要しようとしているわけでもない。かれらのマイノリティ性を強めているのは外部のまなざしの強さと、それにもとづく均質化ではないだろうか。これが、10人の声をじかに聞くなかで、筆者がもっとも強く感じたことである。

ただ、最後に当事者も外部者も意識していると考えられる、このコミュニティの境界となる決定的な要因が存在する——ごみ減量に取り組む「時間の有無」である。退職や子どもの独立後「時間がある」から減量できるという話はインタビュー中にも多く聞かれ、「気持ちと『時間』があればごみは減るはず」と言及していた人もいた。現代の日本社会におけるごみ減量は、時間があるから減量が実現できている人びとと、時間はなくてもそれに勝る思いがあるから減量が実現できている人びとしかいないということも考えられる。時間も思いもない外部者には、たとえごみ袋が有料化されるといったような外部の働きかけがあっても、減量するのが難しいのではない

かとも考えられる。

## 5-2. 地球か、日常か

近年、地球環境問題に疑問符を投げかける立場も出現してきている。レジ袋の削減は意味がないなどといった日常レベルの話から、地球温暖化は嘘だといった地球レベルの話まで持ち出され、今日でも熱い議論が繰り広げられている(武田・杉本 2009 など)。ここでは、各主張の信憑性を検証するのではなく、なぜそのような反論が出てくるのだろうかということに注目して議論をすすめたい。

このような反論が出てくる一因として、前述のマイノリティ性が賦与される理由と共通するものがあると考えられる。つまり、環境保全を訴える人びとの日常と地球規模の話という格差があまりにも大きく、かつ社会そのものの変化を強調・唱道するため、外部者はその説教臭さに辟易し、なかには反発する者も出てくるのではないだろうか<sup>8)</sup>。

環境保護啓発活動におけるこの「うさん臭さ」を軽減させるためには、地球レベルで話をすすめるより、家庭における減量行為の方法など、日常生活における実践的な話は他者にも共感が得られやすいと考えられる。「地球を大切に」ではなく、家族や家計、地域のための減量のように、外部者にもイメージしやすい身近な話のほうが外部者の共感は得やすいのではないだろうか。ただ漠然と「地球」という巨大で、個人が容易に想像しがたいものだけを理由に、具体的な方法を提示しないごみ減量の促進よりも、身近に取り組むことができる簡単で楽しい啓発運動のほうが広く一般に受け入れられるのではないだろうか。これが、10人のごみ減量に取り組む人びとの生の声を聞き、ときにはかれらの実践を自分の生活に取り入れていくなかで、筆者がもっとも痛切に考えたことであつた。

## 6. 結びにかえて

冒頭で資源人類学における廃物利用の先行研究をふたつ紹介した。今回の調査における



インフォーマントが取り組んでいたごみ減量実践は、日常生活でものが生産時に付加された機能を果たし、破棄される以前でリデュースすることも含まれるため、廃物利用と完全に同等なものではない<sup>9)</sup>が、最後に、本論が対象としたインフォーマントにとって、ごみ減量を促す動因はいったい何であったか検証したい。

今回の調査において、インフォーマントによって多く語られたことばがある——「ものを大切に」である。半世紀以上にわたって使いつづけ、交換可能な部品が容易に調達できなくなったラジオでも修理して使いつづける。高価でも長く使えるものを一生使う。古着などをリメイクして用途を変えてでも使用し続ける。これらの実践にもみられるとおり、かれらのなかに共通するのは「ものを大切にすする心」という、何ら特異でもなく珍しくもない考え方であった。この根底にある共通基盤に、それぞれ親の教えや育児、すべてを手作りしたいという思い、ものに対する思い出や人生のひとこまが結びつくこともあり、ときには「地球が危ない」などの事項が付加され、この人たちをごみ減量に駆り立てているのではないかと考えられる。

戦後日本は、高度経済成長を期に社会が大きく変化し、その巨大な流れのなかで新たなものがたくさん開発・生産され、人びとの日常生活に流入してきた。広告や宣伝など溢れんばかりの情報に流され、あらゆるものが手軽に安価で購入できるようになった。そのようななかで、受容するかどうか事前にしっかりと見きわめ、受容しても長く大事に使い、生産時の機能を果たさなくなっても、資源として別の使用方法がないか工夫を凝らしてきたのが「ごみ減量に取り組む人びと」ではないだろうか。それが、かれらにとっての「再文脈化」だとも言い換えることができるであろう。

### 謝辞

本論文は、2011年度に京都大学総合人間学部

に提出した卒業論文を加筆、修正したものである。論文作成にあたり、調査に協力していただいた10名のごみ減量実践者やエコイベント関係者、ならびにご指導くださった菅原和孝先生、金子守恵先生にはたいへんお世話になりました。記して、感謝申し上げます。

(京都大学 総合人間学部 文化環境学系 文化人類学専攻 2011年度卒業; 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究専攻 博士前期課程)

### 注

- 1) ごみは一概に定義することが困難な語である。なぜなら、時代、場所、社会環境などにより、ごみの定義は左右されるからである。たとえば、江戸時代の文献によると、日本ではごみは「塵芥<sup>じんがい</sup>」と呼ばれ、「ちり」や「あくた」の総称であったが、現代の日本社会におけるごみは、「ちり」や「あくた」のような微細なものばかりとは言いがたい(廃棄物学会編 2003; 高月 2004)。以上のような議論をふまえて、「人間の生活にいかにも価値のあるものであっても、所有者が不要なものとして排出した固形のものすべて(廃棄物学会編 2003; 2)」という定義を、ここでは使用したい。
- 2) 京都市清掃局(現、環境局)廃棄物調査検討委員会が、1980年より実施している家庭ごみの調査。毎年定期的に地域ごとに約50世帯を対象に、家庭ごみ100から150袋程度の中身を、ごみとなる前の使用用途別に、約300項目の組成に分類し、項目別に重量と容積、含水率を測定している。使用用途別の分類項目を大まかに分けると、食料品、商品、容器・包装材、使い捨て食品、PR関係(広告用チラシなど)、事業所で使用、その他の7項目である(高月 1998, 2004; 酒井 2010)。
- 3) 環境家計簿とは、家庭からの環境負荷を定量的に記録しその削減をすすめるための冊子である。1996年に環境省(当時)が作成し

た(鈴木 2010)。毎月の電気、ガス、水道、ガソリンの請求書から使用料を記録し、計算すると二酸化炭素算出量の月々の推移がわかる。

- 4) 京都市では過去に助成を受けてない人なら、電動式生ごみ処理機、生ごみコンポスト容器ともに購入価格の半額(限度額は電動式生ごみ処理機 35,000 円、コンポスト容器は 4,000 円)を得ることができる(京都市 2011)。
- 5) 家庭ごみ細組成調査によれば、容器・包装材のうち約 70 パーセント(容積比別)がプラスチック包装である(高月 2004)。他の多くの市町村と同様に、神戸市でも容器・包装プラスチックごみは可燃ごみ、缶・びんと分別するように指定されているが、容器・包装プラスチックごみの容積の 6 割は空気だといわれている。
- 6) Extended Producer Responsibility の略。OECD の「政府のための拡大生産者責任に関するガイダンスマニュアル」によれば「製品に対する生産者の、物理的及び(もしくは)財政的責任が、製品ライフサイクルの使用後の段階にまで拡大される環境政策アプローチ」と定義されている(山川 2010c)
- 7) マクロビオティックとは、日本古来の食の知恵を活かした食養法のことである。歴史的には、明治時代に石塚左玄という日本陸軍の薬剤師が確立した食事による病の治療法「食養」を、昭和期に桜沢如一が継承、発展した。現在では、この食養法は海外にも広まっている。マクロビオティックの二大思想は、人間の身体と生まれた土地は不可分の関係にあり、自分の出自の土地で作られた旬の食材を食べる「身土不二」と、食材は全体を食べなければならないという「一物全体」となっている(持田 2005)。
- 8) 筆者自身も環境イベントに参加しているときは、地球環境保護をひたすら声高に訴える空間に違和感をおぼえてしまった。各インフォーマントと対談しているときは、相手の話、相手の世界に引き込まれてしまうが、イベントのなかで繰り返されていたのは、実践的なごみ減量方法の伝授から

小学生が描いた環境保護を訴えるポスター、さらに、お笑い芸人のステージなど多種多様であり、けれど根底にあるのは「地球を大切に」という論調であった。個人へのインタビュー時に受けた比較的好感のもてる、どちらかといえば自然な印象と、イベント参加時におぼえた違和感とのあいだには大きな断絶があったことを強調しておきたい。

- 9) リデュースとは、廃棄物の「発生量」そのものを減らすことであり、その方法は製造過程から消費の工夫、生産・消費の適正化など多岐にわたる。リユースは、一度使用された製品や部品が使用者を替えつつ、そのままの形で使用されることを指す。同じものが再び使用されても、使用者が変わらないかぎりリデュースに含まれる(野村 2010; 山川 2010b)。家庭を場とした日常生活におけるごみ減量行為は、その大半がリデュース(発生抑制)にあたる。しかし、同じリデュースでも家に入ってくる段階でのリデュース、ものが「ごみ」へと変化する直前のリデュース、破棄時のリデュースの 3 段階にわけられると考えられる。

#### 参考文献

- 廃棄物学会編 2003. 『新版ごみ読本』中央法規.
- 池谷和信編 2003. 『地球環境問題の人類学』世界思想社.
- 稲村光郎 2010a. ごみ処理の歴史. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』68-69. ミネルヴァ書房.
- 稲村光郎 2010b. ごみをめぐる出来事. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』70-71. ミネルヴァ書房.
- 稲村光郎 2010c. ごみ処理の行き詰まりと循環型社会. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』72-73. ミネルヴァ書房.
- 風間計博 2003. 「廃物」の流用と創造性: 現代キリバスにおける物質文化再考. 佐藤

- 幸男編『太平洋アイデンティティ』143-172. 国際書院.
- 貴田晶子 2010a. 産業廃棄物. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』176-177. ミネルヴァ書房.
- 貴田晶子 2010b. 有害廃棄物, POPs. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』208-209. ミネルヴァ書房.
- 湖中真哉 2007. 小生産物(商品)の微細なグローバル化: ケニア中北部・サンブルの廃物資源利用. 小川了編『躍動する小生産物』25-62. 弘文堂.
- 京都市 2011. 電動式生ごみ処理機・生ごみコンポスト容器購入助成金制度. <http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000000786.htm> 1(閲覧日: 2012年1月3日).
- 京都市長公室統計課編 1956. 『京都市勢統計年鑑』京都市役所.
- 京都市行政局統計課編 1961. 『京都市勢統計年鑑』京都市役所.
- 京都市環境局 2002. 京の始末を考える: 明日の地球を旅する子供たちへ. [http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/cmsfiles/contents/0000044/44444/kyo\\_no\\_shimatsu.pdf](http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/cmsfiles/contents/0000044/44444/kyo_no_shimatsu.pdf) (最終閲覧日: 2011年12月28日).
- 京都市環境政策局 2010. プラスチック. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』128-129. ミネルヴァ書房.
- 京都市企画調整局情報化推進室情報統計課編 1996. 『京都市統計書』京都市.
- 京都市総合企画局情報化推進室情報統計課編 2001. 『京都市統計書』京都市.
- 京都市総合企画局情報化推進室情報統計課編 2006. 『京都市統計書』京都市総合企画局情報化推進室情報統計課.
- 京都市総合企画局情報化推進室情報統計担当編 2011. 『京都市統計書』京都市総合企画局情報化推進室情報統計担当.
- 京都市総務局総務部統計課編 1986. 『京都市統計書』京都市役所.
- 京都市総務局総務部統計課編 1991. 『京都市統計書』京都市役所.
- 京都市総務局統計課編 1981. 『京都市統計書』京都市役所.
- 京都市統計解析センター編 1966. 『京都市統計書』京都市役所.
- 京都市統計センター編 1971. 『京都市統計書』京都市役所.
- 京都市統計センター編 1976. 『京都市統計書』京都市役所.
- 京都市役所総務室統計課編 1951. 『京都市勢統計年鑑』京都市役所総務室統計課.
- 持田鋼一郎 2005. 『世界が認めた和食の知恵: マクロビオティック物語』新潮新書.
- 野村直史 2010. リユース. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』88-89. ミネルヴァ書房.
- 酒井伸一 2010. 家庭ごみ細組成調査. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』180-181. ミネルヴァ書房.
- 鈴木靖文 2010. 環境家計簿. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』30-31. ミネルヴァ書房.
- 高月紘 1998. 『自分の暮らしがわかるエコロジーテスト: 環境問題は生活のエコ度チェックから』講談社ブルーバックス.
- 高月紘 2004. 『ごみ問題とライフスタイル: こんな暮らしは続かない』日本評論社.
- 武田邦彦・杉本裕明 2009. 『武田邦彦はウソをついているのか?: 日本人の環境問題の常識を覆す熱闘論』PHP 研究所.
- 内堀基光 2007. まえがき. 内堀基光編『資源と人間』1-5. 弘文堂.
- 山川筆 2010a. 3R の考え方. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』82-83. ミネルヴァ書房.
- 山川筆 2010b. リデュース. 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』86-87. ミネルヴァ書房.
- 山川筆 2010c. 拡大生産者責任(EPR). 3R・低炭素社会検定実行委員会編『3R 低炭素社会検定公式テキスト』98-99. ミネルヴァ書房.